

子どもの心と 学校臨床

The Journal of Clinical Psychology
for Children and School, No.1

August, 2009

第1号 2009年8月



創刊の辞 ■ (九州大学名誉教授) 村山正治

特集 学校でうまくゆく心理アプローチと考え方

- エンカウンターグループでクラスを変える…………… (九州大学名誉教授) 村山正治 00
学校のなかでのコミュニティ・アプローチ…………… (九州産業大学) 窪田由紀 00
保護者とどう付き合うか——家族療法の視点から…………… (東京大学) 中釜洋子 00
認知行動療法で子どもと向き合う…………… (新潟大学) 神村栄一 00
ブリーフセラピーで学校問題に対応しよう…………… (目白大学) 黒沢幸子 00
ストレスマネジメントとリラクセーション…………… (兵庫教育大学) 富永良喜 00
転移と逆転移から SC 業務を考える…………… (愛知県立大学) 祖父江典人 00
ユングアンの考え方を学校に生かす…………… (京都文教大学) 高石浩一 00
集団への視点とスクールカウンセリング…………… (明治大学) 諸富祥彦 00

連載

発達障害のある子どもたちの家庭と学校

- (1) 発達障害があるということ…………… (中京大学) 辻井正次 00
近頃のシシュンキ (1)…………… (島根大学) 岩宮恵子 00

リレー連載

- 相談室の子どもたち (1) 子どもの成長力…………… (放送大学) 滝口俊子 00
学校をめぐる問題と対応 (1) 君はモンスターペアレントに対応できるか？
…………… (龍谷大学) 吉川 悟 00

【文献再録】読んでおきたい論文 (1) スクールカウンセリングにおいて

- 「絶対誰にも言わないで」と訴える二事例…………… (にいがわクリニック) 東 千冬 00
この本、読むべし——自薦式ブックレビュー (1)…………… (神戸大学) 森岡正芳 00
書評 衣斐哲臣著『子ども相談・資源活用のワザ』…………… (首都大学東京) 長沼葉月 00
次号予告 00 / 編集同人一覧 巻末

創刊にあたって

本誌編集同人を代表して 村山正治

新しい時期にきたスクールカウンセラー事業

平成7年から始まった文部科学省のスクールカウンセラー事業は国家事業として、財団法人日本臨床心理士資格認定協会認定の臨床心理士をスクールカウンセラーとして雇用する画期的な事業であった。専門性と外部性と呼ばれているように、公教育の現場に外部の専門家（臨床心理士）を投入するという日本の教育史上、全く新しい扉を開く歴史的な事業であった。初年度の154校の中学校に派遣された熟練の臨床心理士たちは、現場からたいへん高い評価を受けて、当初懐疑的であった現場からの要望が高まり、3億円から始まった予算も、うなぎ登りに増えていった。平成18年度には、全公立中学校に派遣され、平成20年度からは小学校に派遣される段階まで発展してきている。

しかし、昨今の国家や自治体の経済情勢の逼迫から、公教育に対する予算が減少しており、同時にスクールカウンセリング事業への配分も減少している。政府の教育政策がゆとり教育からの転換、さまざまな社会状況の急速な変化から生みだされる不登校、いじめ、虐待、教師のうつ病などによる休職者の増大など、事態は深刻度も高まっているのにもかかわらず予算減である。スクールカウンセラーの実績と効果をもっと社会に知っていただくことが必要である。

こうした状況の中で、子どもと学校が元気になるための「学校臨床」のさらなる発展を願って登場したのが本誌『子どもの心と学校臨床』である。平成20年度からのスクールソーシャルワーカーの投入や、各地域における独自の援助職・ボランティアの導入など、学校臨床においては、他の専門職が協力・協調してことに当たるコラボの時代がきている状況にある。いわば移行期にあり、裏を返せば、学校臨床というものの考え方を集約するような「器」が必要である。子どもや保護者、教員、地域住民までも含む学校コミュニティに援助者としてどうかかわるのか。これまでの積み上げてきた実績を評価し、原点を見直し、学校現場の最前線に向けて、新しい視点や大切な情報を提供するのが本誌の使命である。

こういう雑誌に育てていきたい

不登校への対応から出発したスクールカウンセラーの仕事は非行、虐待への対応と広がり、最近では発達障害が大きな課題である。また阪神・淡路大震災や池田小事件などへの支援に活躍したのを契機に、いまや緊急支援は臨床心理士の組織的働きとして社会的に高く評価されている。学校をゆるがす事件や事故に対し、緊急支援を行うのも臨床心理援助学を学んだスクールカウンセラーならではの仕事であろう。また最近では、うつ病などで教師の長期休職者が社会問題になっている。このこともスクールカウンセラーの仕事になってきている。こうしたことも本誌でとりあげてみたい。

中学校から始まったスクールカウンセリングは、高校や小学校、プレススクール（幼稚園、保育園など）に広がり、それぞれにおいて活動の特徴と工夫がある。公立と私立における差異もあろう。またコミュニケーションスキル教育実施のためのグループワークも大切である。これらも取り上げる必要があるだろう。

心理的問題はその社会の文化の関数であるといわれている。たとえば、日本で問題となっている不登校は、ほかの国ではさほど深刻な状態ではない。昔から、「炭鉱とカナリヤ」のたとえがある。子どもの心は大変柔軟で社会の影響も受けやすい。子どもの問題は社会の鏡である。我々が学校というコミュニティでぶつかる課題は、フラクタル構造のように、日本の文化、社会が抱えている課題と取り組んでいることになる。目の前の課題の解決だけでなく、そこにほのみえる社会的課題を見据えなければならない。本誌においてはそうしたところにも目を向けたい。

思いついたところを羅列したが、こうした現在必要な役立つ知識と実践の情報を提供できるよう本誌を作っていくつもりである。そして、既成の学問を学校現場に適用するだけでなく、生の問題に直面している現場からの取り組みを十分紹介したい。この領域独自の発展がある。新しいことが生まれている。本誌はそうした実践知を紹介することで現場に貢献したい。

本誌『子どもの心と学校臨床』は、臨床心理士、スクールソーシャルワーカー、教師、養護教諭、教育行政関係者などが共同して子どもや家族の課題に取り組んでいけるよう知恵を絞っていくつもりである。新鮮な情報、基礎知識、新しい工夫や実践、国際的比較などなどを盛り込み、新しい学校臨床心理学の創造につなげていきたい。そうして是非、読者の皆さんに雑誌づくりに参加していただければと思う。読者のコーナーやニュースレターの発行など、新しい雑誌の形態を目指している。

特集・学校でうまくゆく心理アプローチと考え方

ブリーフセラピーで学校問題に対応しよう

黒沢幸子*

* 目白大学人間学部心理カウンセリング学科

Ⅰ 学校現場の特性にフィットする「ブリーフセラピー」

学校問題への対応において重要なことは、学校はチーム対応が原則であること、また学校は時間コンシャスな場であることである。

チーム対応では、児童生徒、教職員、スクールカウンセラー、保護者、地域といった、多くの関係者が相互にその力を活かし合い、学校の発達促進的な風土づくりに貢献することが眼目である。そこでは、悪者を作らず、お互いの肯定的な側面に焦点を当てていくことが重要となるだろう。また、学校では、時間割、学期、学年、進級、卒業など、時間の節目を用いて、組織的・計画的に教育が行われている。日々発達の途上にある子どもたちのためにも、「時間」を有効に活かす関わりが重要である。いじめであれ不登校であれ、それが子どもの成長に役立てられる形で、早期に解決されることが切望されるし、担任は1～2年というリミットの中で、少しでも子どもたちへ効果的な対応ができるように模索している。

このような学校特性に「ブリーフセラピー」は大変にフィットするモデルである。「ブリーフ」を直訳すれば「短期」であるように、「時間」に対して敏感／意図的なモデルであるが、実際にブリーフセラピーが目指すところは、効果的・効率的な援助サービスである。そのためには、クライアントや関係者との「同盟作り」こそが、物事を「ブリーフ」に解決する要諦であり、それに役立つ知恵がブリーフセラピーには多く含まれている。

ブリーフセラピーに共通する背景は、「変化」への志向性であり、問題は見方や立場によって異なるという、事象に対する柔軟な捉え方（構築主義／構成主義）

連載・発達障害のある子どもたちの家庭と学校

(1) 発達障害があるということ



辻井正次
(中京大学)

I はじめに

この連載は、学校臨床における発達障害のある子どもたちや、発達障害の障害特性と同質の課題を連続的にもつ子どもたちの家庭と学校での支援の実際の課題に関して、皆さんと一緒に考えていくものです。連載においては、実際の臨床現場で私が体験してきた臨床的な素材を中心にしていきます。しかし、また読者の皆さんの方で、より実証的な知見を紹介した方がいいようであれば、先に示した臨床素材に関連するエビデンスを補足していくことを考えていこうと思います。

私の臨床家としての歩みは、障害ある子どもたちとの出会いからスタートしています。最初にお会いしたケースも重度の知的障害を伴う自閉症の少年でした。また、同時に、重度重複障害（重度心身障害）幼児のゆえ村上英治先生のMRグループに参加させていただきました。ここでの体験は、すでに『“いのち”ふれあう刻を一重度心身障害児との心理臨床』（川島書店）にまとめられています。必要以上の「中立性」を強調することで、実際の日常生活での支援を遠ざけていた心理臨床の訓練とは異なり、実際に家庭訪問をしたり、合宿をしたり、家族と子どもとの関わりを間近にすることで、人が何らかの困難さを抱えるほど、他者とのつながりのなかに生きていくし、そこでのサポートが重要だということを学ぶことができました。

自閉症のある子どもたちや青年たちと多く関わるようになった頃、現在も長く共同研究を重ねている「相棒」である児童精神科医の杉山登志郎先生に声をかけていただき、学習障害やアスペルガー症候群の研究プロジェクトと一緒にスター

リレー連載

相談室の
子どもたち
(1)



子どもの成長力

滝口俊子

(放送大学大学院臨床心理学プログラム)

子どもの心理的な問題に関わり始めて、いつの間にか 40 年。大学病院の精神神経科、大学付属の心理相談室、個人開設の相談室などで、お子さんと親御さんにお会いし続けてきました。また、教育相談所や病院や学校などの事例を、心理臨床の後輩や先生方からも聴かせていただきました。河合隼雄先生をはじめ先輩の臨床家を通して、沢山の子どもたちに出会いました。

今回は、相談室において、大切なことを学ばせてもらった子どもたちに登場してもらおうと想います。



小学校低学年のその子は、心身ともに活発な男の子でした。入学したころは「ベテランの担任の先生に可愛がられ、友だちにも一目おかれていましたが、やがて言動が乱れてきました。教室で落ち着いて机に向かっていることができず、遊び時間も友だちに手を出すようになりました。教育熱心な先生は、何とかして彼を落ち着かせようと、注意したり叱ることが多くなりました。けれども、彼の落ち着きのなさは収まるどころか、乱暴さを増しました。

担任の先生に注意された母親は、相談室に来るなり、「先生の教育が悪い」と、教師を激しく責められました。私は、とにかくお子さんに会いたいと提案しました。



お母さんに連れてこられたその子は、相談室の箱庭療法の遊具に関心を向けて、遊び始めました。その反応性の良さは、知的な発達年齢以上に早いことを感じさせました。

箱庭の箱の中での展開は、殺し合いのテーマでした。怪獣たちの戦い合いの様

リレー連載・学校をめぐる問題と対応（１） 君はモンスターペアレントに対応できるか？ ——そのためにすべきこと



吉川 悟
(龍谷大学文学部)

Ⅰ はじめに

日本において「スクールカウンセラー」という教育の専門性とは異なる視点を持った専門家が「学校」というフィールドに参入したのは、1990年代初期からで、文部科学省の施策に対応してのものであることは周知であろう。省庁の肝いりで、荒廃する学校不適應や教育相談に対して「臨床心理士の専門性によって支援する」という大義の下、すでに20年を経ようとしている。中学校の一部から、中学校全校配置、そして小学校や高校など、そのフィールドは、激増している。しかしその一方で、スクールソーシャルワーカーという名称も散見するようになった。面接室から動かず、自分で事例を抱え込み、教員のコンサルテーションもままならず、職員研修も不充分といった、昔ながらの職能に固執するスクールカウンセラーへの不満からであろうか。一部には、各地域の教育委員会の経済的問題であるとさえ揶揄されてもいる。

加えてここ数年、クレーマーと化した保護者をモンスターペアレントと呼ぶ風潮がある。米国ではヘリコプターペアレントという名称であるが、これは決してクレーマーを指し示すのではなく、過保護な親というニュアンスの方が強い。こうしたクレーマーと化した保護者たちの影響は、教員を寒からしめている。一旦このような保護者を担当するようになれば、当然その対応に追われると共に、プライベートな時間を確保できなくなることも少なくない。そして、適切に対応していたとしても、その翌年には燃え尽きて休職を余儀なくされ、復帰が困難で退職というストーリーも、巷には氾濫しはじめている（小坂2007、菅原2008）。

この本読むべし——自薦式ブックレビュー——

学校に行きながら考えよう

森岡正芳
(神戸大学)



リレー連載(1)

まずはスクールカウンセラーの本から紹介しよう。

◆かしまえりこ・神田橋條治『スクールカウンセリングモデル 100—読み取る。支える。現場の工夫。』(創元社)

スクールカウンセリングや学校現場、子育て支援での臨床心理の仕事は多様で、自分の限界をよく見極めつつ、現場に応じて柔軟に動くことがもとめられる。「逆らわず、かといって流されず」。このような基本姿勢はもちろん学校臨床にかぎらない。神田橋のコメント付きかしまのこの本は事例で勝負。有無を言わさない。学校に行くと、スクールカウンセラーは柔軟に動き積極的に教師と連携して子どもたちと家族のサポートにあたることを意識させられるが、これは勘違いである。教師と連携するのはスクールカウンセラーではない。教師が子どもの心と連携できるように側面から支えるのがその仕事である。このようなはたとさせられるコメントが随所にある。

さて、以下紹介する本はスクールカウンセリングの現場と直接関係ないかもしれない。しかし学校現場は独自の文化があり、一つ一つの学校には地域環境と歴史に根ざした風土がある。私たちが学校に行くことはそれだけで文化摩擦が生じることもあるし、何より私たち自身がカルチャーショックを受ける。しばらく心身の状態の変動に留意したい。その心のよすがとなりそうな印象に残った本を3冊あげたい。それぞれが現場のなかでマイノリティ(少数者)への想いを向け、いっしょに悩みその上で生まれた実践の工夫と理論を描いているものである。

◆滝川一廣『「こころ」の本質とは何か—統合失調症・自閉症・不登校のふしぎ』(ちくま新書)

クライアントに実際に会う。この人がどういう状態にあるかよくつかめない。そ

子どもの心と 学校臨床

次号予告

特集：学校の中の発達障害の
子ども：クラスに発達障害
のある子もいるというあ
たりまえの現実の中で

第2号 2010年2月発行

学校における発達障害のある子どもたちのための「あたりまえの」サポート作戦
..... (中京大学) 辻井 正次

生物学的精神医学から見た「発達障害であること」
..... (浜松医科大学) 中村 和彦

学習から発達障害のある子どもへのサポートを組み立てる
..... (浜松医科大学) 藤田 知加子ほか

発達障害のある子どものための学校環境の調整 (宮城学院女子大学) 白石 雅一
発達障害のある子どものためのゆったりした学校生活づくり

..... (岐阜聖徳学園大学) 小泉 晋一

発達障害のある子どものための楽しい人との関係のある学校生活作り
..... (東海学院大学) 明翫 光宜

発達障害のある子どもの性と関係性の教育..... (名古屋大学) 川上 ちひろ
(あいち小児保健医療総合センター) 杉山 登志郎

発達障害のある子どものサポートのための保護者との共同戦線の始め方
..... (山口大学) 木谷 秀勝

教師のための発達障害の基本的知識..... (鳥取大学) 井上 雅彦

発達障害のある子どもにとっての難しいサポート体制の体質改善術
..... (浜松医科大学) 中島 俊思

連載：

発達障害のある子どもたちの家庭と学校 (2) (中京大学) 辻井 正次

近頃のシシュンキ (2) (島根大学) 岩宮 恵子

相談室の子どもたち..... (日本女子大学) 鶴養 美昭

学校をめぐる問題と対応：いじめ——中学生の場合
..... (京都教育大学教) 本間 友巳

この本、読むべし (自薦式ブックレビュー) (文教大学) 岡村 達也
ほか